

それぞれの
安心できる
場所へ。

富山県

こどもの居場所

Toyama Prefecture Children's Safe Spaces Guide

ガイド

素案

学校に行きづらいときも、家にいてづらいときも、
あなたが安心して過ごせる場所は、きっとあります。
ひとりで抱えなくて大丈夫。
あなたに合う「居場所」を見つけてください。

このリーフレットについて

この冊子は、学校に行きづらさを感じている
こどもや、その保護者の方へ向けて作成しました。

いま、こどもたちを取り巻く環境は大きく変化しています。
「学校だけがすべてではない」そんな考え方も広がっています。
富山県内には、学校以外にも安心して過ごせる場所や、
自分のペースで過ごせる学びの場があります。

このリーフレットでは、
フリースクール、こどもの居場所
相談できる場所などを
紹介しています。

気になる場所があれば、見学や相談だけでも大丈夫です。
無理に通う必要はありません。
「ちょっと話を聞いてみる」ことから始めてみてください。

富山県内のこどもの居場所について



こどもの居場所
(富山県ホームページ)



とやま寄りそい居場所マップ
全40ヶ所程度の居場所紹介



フリースクール等こどもの
居場所づくり支援検討会
(令和8年度)

なぜ「居場所」が必要なのか

「居場所」があることの大切さ
こどもたちは、それぞれ違う理由で、
学校に行きづらくなることがあります。

- ◎人間関係がうまくいかない
- ◎勉強についていけない
- ◎体や心がつらい
- ◎理由はよくわからないけれど行けない

どれも、めずらしいことではありません。

大切なのは、
「学校に行くこと」だけではなく、
安心して過ごせる場所があることです。

こんな気持ち、ありませんか？

- ◎家にいても落ち着かない
- ◎誰にも会いたくない、でも、ずっと一人もさびしい
- ◎自分のことがよく分からない

そんなとき、「ここにいていい」と思える場所があると、
少しずつ安心を取り戻し
元気になっていくことがあります。

居場所を開けたら、 不登校のこどもたちが やってきた

コミュニティハウス「ひとのま」宮田さん

高岡市でコミュニティハウス「ひとのま」を15年間運営している宮田さん。実は、最初から不登校支援を目指していたわけではないという。「ただ家を開けて、誰でも来られる場所にしたいんです。そうしたら居場所を必要とする人たちが集まってきて、その中に不登校のこどもたちがたくさんいたんです。」「誰でも来られる場所」をつくった結果として、多くのこどもたちが訪れるようになった。

不登校は学校だけの問題ではない

長年こどもたちや保護者、学校と関わる中で、宮田さんは「学校は本当に頑張っている」と感じている。

一方で、不登校の背景は学校だけにあるわけではない。生活困窮や家庭環境、保護者の体調不良など、さまざまな事情が絡み合っているケースが少なくないという。学校も状況を把握していても解決できない。行政や関係機関も支援につながり切れない。そんな狭間で困っているこどもたちの存在を、宮田さんは日々目の当たりにしている。

こどもたちが求めているのは 「助けて」と言える関係

「ひとのま」では週3回、誰でも利用できる食事の場を設けている。そこで感じるのは、こどもたちが本当に求めているのは

食事そのものではないということだ。「困ったときに『助けて』と言える相手がいること。誰かが気にかけてくれていること。それが一番大切なんです。」必要なのは“サービス”ではなく、“つながり”なのだ。



目指すのは、安心できる繋がりがある社会

「誰もが困ったときに助け合い、安心して暮らせる社会を目指したい。」

家庭、学校、地域、行政がゆるやかにつながり、困ったときに誰かに相談できる。そんな環境があれば、こどもたちはもっと安心して育つことができるはずだ。

最後に宮田さんはこう期待を寄せた。

「こどもたちや関わる大人たちが幸せになるために何が必要なのかを、みんなで気軽に話し合える富山県になってほしいですね。」居場所とは、建物ではなく、「助けて」と言える人とのつながりなのかもしれない。



私の場合

田中美葉さん

現在、富山大学芸術文化学部2年生の田中美葉さんは、中学3年生から高校2年生まで学校に通えなかった経験があります。

小学生・中学生の頃は学校が大好きで、部活動や勉強、生徒会活動などに熱心に取り組んでいました。しかし、さまざまなことが重なり、中学3年生のときに突然学校へ行けなくなりました。評定がつかなくなり、志望していた高校への進学が難しくなったことへの焦りでいっぱいだったそうです。その後、仲の良い友人に誘われて同じ普通高校へ進学しましたが、高校でも授業に出られない日が多くありました。それでも、友人や先生方の支えを受けながら、なんとか卒業することができました。私の高校時代は、コロナ禍という特別な

事情もありました。出席停止扱いとなる欠席が多く認められていた時期だったため、出席日数の面で救われました。卒業後は2年間、山小屋やスキー場で働きながらさまざまな経験を積み、その後予備校に通い、同世代より3年遅れて大学へ進学しました。

田中さんは当時を振り返り、「学校が自分の世界のすべてのように感じていたため、学校に行けない毎日はとても心細く、自分は社会に適応できていないと思い込み、将来に絶望していました」と話します。このガイドマップを読んでいる皆さんの中にも、学校に行けないことに苦しんでいる人がいるかもしれません。

居場所の選択肢を持つ

田中さんは、「自分が今日できそうなことをマイペースにやることができれば、一番良いと思います。それが家でできるなら、無理して外に出なくて良いと思います。でも、



「今日は家の外に出たい」と思ったとき、学校以外においても自分一人で安全に行って帰ってこれそうな居場所を見つけることは、大切なことだと思います。」と話します。こどもは大人に比べて、安全面や移動手段の制約から、一人で行動できる範囲が限られています。また、学校以外の居場所という選択肢を知らないこどもも少なくありません。周りの大人には、そうしたこどもたちにさまざまな居場所の存在を伝えてほしいと思います。ガイドマップに掲載されている場所のほかにも、図書館や飲食店、スポーツ施設など、こどもの居場所になり得る場所はたくさんあります。そして、実際に行くかどうかは本人の気持ちを大切にしながら決めてもらうことが大切です。

田中さん自身は、中学3年生の1年間、ほとんど家から出られない日々を過ごしていました。しかし、「かたは塾」というフリースクールや図書館、河原、公園、ボルダリングジムなど、いくつかの選択肢があったことで、自分のタイミングで少しずつ外へ出ることができました。また、高校生になってからは、少しずつ学校の中にも居場所を見つけられるようになりました。田中さんは、「学校に行くことだけが大切なのではなく、自分らしく元気に過ごせる場所を持つことが大切だと、大人になった今になって実感しています」と話しています。

「先日、通っていた「かたは塾」を久しぶりに訪れました。学校に通っていないこどもたちには、いろんな事情があることを改めて実感しました。今回、お話しした内容が、全てのこどもに当てはまるとは限りません。ひとりひとりの気持ちに寄り添うことが大事なのかなと思います。」



居場所の種類

どの居場所も大切、過ごし方や支援の形はさまざまです。



状況や気持ちに合わせた、さまざまな居場所があります

例1 【多様な学びの場】
フリースクール



- ・利用者：5～10名程度
- ・過ごし方：皆で
- ・開所日数：週3～5日
- ・食事の提供：場合による(弁当等)
- ・プログラム：ある場合が多い
- ・学校との連携：強い

例2 【安心・安全なスペース】
居場所



- ・利用者：1名～20名程度
- ・過ごし方：皆でも一人でも
- ・開所日数：週3～5日
- ・食事の提供：ある場合が多い
- ・プログラム：なし
- ・学校との連携：場合による

例3 福祉サービス(受給者証必要)
放課後等デイサービス



- ・利用者：最大10名程度
- ・過ごし方：プログラムによる
- ・開所日数：週3～5日
- ・食事の提供：あり
- ・プログラム：あり(個々に応じて)
- ・学校との連携：あり

例4 【地域の交流の場】
こども食堂



- ・利用者：10～20名程度
- ・過ごし方：皆で交流／食事
- ・開所日数：週1日程度～月1回程度
- ・食事の提供：あり
- ・プログラム：なし(自由)
- ・学校との連携：弱い

例5 【公共施設】
児童館・図書館

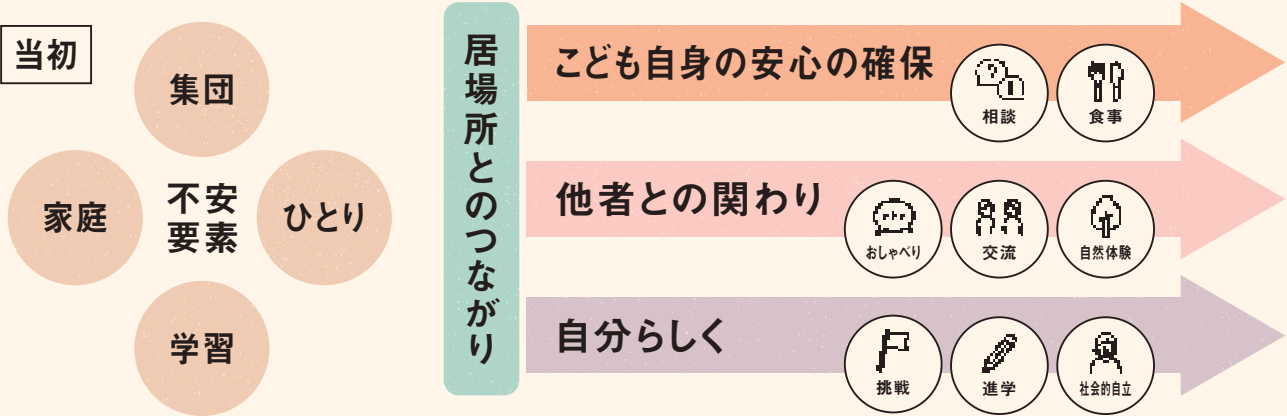


- ・利用者：個人単位
- ・過ごし方：基本は一人
- ・開所日数：週3～5日程度
- ・食事の提供：なし
- ・プログラム：なし(自由)
- ・学校との連携：なし

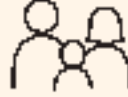
例6 【学習支援】
塾や通信教育



- ・利用者：1～2名程度
- ・過ごし方：一人で、もしくは少人数
- ・開所日数：週1～2日
- ・食事の提供：なし
- ・プログラム：あり(学習が基本)
- ・学校との連携：場合による

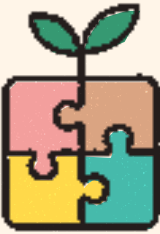


こどもの思いはさまざま

誰かと 過ごしたい	静かに 過ごしたい	学びたい	まずは心を 休めたい	家庭支援 が必要	福祉支援 が必要
					
ひとりが不安	集団が不安	学習が不安	安心したい	家庭の状況に サポートが必要	さまざまな サポートが必要
フリースクール	居場所	塾	居場所	行政サービス	放課後等デイサービス
こども食堂	図書館	通信教育	自宅で過ごす	福祉サービス	相談支援、医療サービス

大切なのは「その子に合った場所」

それぞれの居場所には、それぞれの役割があります。どの居場所も、こどもたちにとって大切な存在です。



目指す姿

特色あるそれぞれの「こどもたちの居場所」が連携し、こどもが安心して自分らしく過ごせる「サードプレイス」が必要。連携・協働し、すべてのこどもが自分らしく育ち、活躍できる地域へ。

How to Use the Service & FAQ

利用の流れ Q&A

- よくある質問
- 気になる場合は問い合わせてください。

Q. 行かなきゃいけませんか？
A. 無理に行く必要はありません。行きたいと思ったときに大丈夫です。

Q. 見学だけでもいいですか？
A. 大丈夫です。多くの場所で見学や体験ができます。

Q. 学校と情報共有されますか？
A. 本人や保護者の希望を大切にしながら必要に応じて連携します。

Q. お金はかかりますか？
A. 無料～有料まで様々です。

利用の流れ

- ① 気になる場所を見つける
- ② 問い合わせ・見学する
- ③ 体験してみる
- ④ 自分に合う方法で利用する

利用料の補助制度があります



フリースクール等通所
児童生徒支援事業

あなたへ

学校に行けないことは、「悪いこと」ではありません。

つらいときは、休んでいい。止まってもいい。

大切なのは、

◎安心できる場所があること

◎話を聞いてくれる人がいること

保護者の方へ

お子さんが「行きたくない」と言ったとき、

それは大きなサインです。

まずは、「そうなんだね」と気持ちを受け止めることから始めてください。

保護者のメッセージ(藤嶋共二子氏)

『息子が不登校になった時、私は「この先、どうなるのだろう」と焦り、不安と心配でいっぱいでした。けれど、今振り返ると、息子自身が私以上に不安や怖さを抱えていたのだと思います。「学校に行かせなければ」と頑張るのではなく、まずは私自身が元気を取り戻し、安心して子どもと向き合うことが大切なのだと気づきました。子どもたちは、自分で考え、自分の力で立ち直っていく力を持っています。焦らず、比べず、その子の歩みを信じて見守ること。そして、保護者自身も一人で抱え込まず、誰かに頼りながら一緒に歩んでいくこと。親子が安心を取り戻すことが、未来への一歩になるのだと思います。』

一人で抱えなくて大丈夫です

様々な相談先

◎教育相談センター

◎市町村の相談窓口

◎スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー

◎各居場所・フリースクール

◎富山県こども総合サポートプラザ



富山県総合
教育センター



富山県こども総合
サポートプラザ



富山県こども・若者
総合相談センター



富山県不登校を
考えるネットワーク



フリースクールの
運営実態調査について